

中だちのうち、床のかけ物を取り花をいけべし、花は一色か二色、時のさかんなる花を、なるほどかろくいけべし、不時の花はいけぬもの也、茶の湯の花に法はなし、惡にほいある花は無用也、中だちのうち、水さしをまがり柱と、風爐先きの壁とのなか、まがり柱の地敷より五寸ばかり間、あけ置、茶入を右、茶椀に茶巾、茶せん穂先下へして置、茶玄やく上に置、水さしの前に三ツがなわにかざり、柄杓を大目だ、みの左の壁のなりに、ふたおきにのせ置、水こぼしを柄杓の柄さきより二寸ばかり下にかざり置、亭主は手ぶりにて出、茶たつる事眞の臺子より出る本意なり、色々作意の略義用にたらず、

後入

〔南方録二〕案内の鉦打様之事

主後坐の配合を仕廻鉦を打べし、禪林の規繩に、飯に三下、茶に二下版を打と云へり、其故實を以て、五の數は可然か、千家大方は三聲を被用、とかく案内を報ずる所本意也、版喚鐘其外にても主の料簡次第打べし、他流にどらの音、色々口傳を云へ共不可用、

客手水つかひて後坐に入る事

案内あらば、火相を考次第、相さそひて坐入すべし、手水初坐の心持同前、

〔客之次第〕一數寄屋へ入やう、同見やう、前におなじ、又ほめやうは、あまりにむざとはむる事あしく候、又ほめざるも猶あし、掛物花のほめ時分は、掛物は達摩にとへ、花はうす花の時と古實の習なり、中立より前は多分掛物なり、むざと物をほめまはししては、亭主の手前まひにかまひやかましく侍る故に、まづ物まづかに亭主のままひを見て、炭も入、くわんすもすへてくわんをぬかんとせらる、時分に、見事成御掛物扱かれ、これとほむるなり、達摩の耳にくわんあれば、達摩の時とは心得るなり、

一此くわんを掛くわんすをなをして、何とろくに御座候かと、亭主客へ尋る事、是時のあひなり、